

令和 3 年 6 月 26 日現在

機関番号：32704

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02385

研究課題名(和文) 1960年代前衛演劇の身体表象に関する研究基盤の構築

研究課題名(英文) Construction for a research base about body representations of Japanese avant-garde theater in the 1960s

研究代表者

樋口 良澄 (HIGUCHI, YOSHIZUMI)

関東学院大学・防災・減災・復興学研究所・客員研究員

研究者番号：30796157

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：60年代前衛演劇の資料をアーカイヴ化し、研究基盤を構築(唐十郎アーカイヴ)したのは、演劇研究全体に大きく寄与するものとなるだろう。調査の過程で新資料を発見し「文藝」など一般誌に発表したほか、「実験劇場と唐十郎」展を企画・監修し、小冊子を作成した。資料により、1960年代前衛演劇が、それ以前のリアリズム演劇および「実験」と呼ばれた現代アートの試みと繋がる文脈を持つことを確認できた。さらに海外公演について調査し、世界的な前衛芸術運動の一環としてとらえ直した。これらの成果を、論文として発表し、シンポジウム等で一般に公開できたことは、今後の現代演劇研究を発展させる大きな意義を持つだろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1960年代前衛演劇は、作品の完結性を問い直し、出来事性、過程性といった反作品的方向を試みたため、これまで研究の方法論が確立されていなかった。これらを包括的にとらえた本研究の、演劇アーカイヴによる研究基盤の構築は、演劇研究にとどまらず、日本の現代文化を考察するために大きな意義を持つと思われる。1960年代の社会・文化の変容は、現代への起点と言えるが、前衛演劇も都市、身体、行為、言葉においてその変容を問い、表現を行なった。そうした関係をふまえた本研究が分析した1960年代前衛演劇の国境やジャンルを超えた連関や歴史的位置付けは、現代の社会や文化を考察する上でも極めて重要だろう。

研究成果の概要(英文)：The archiving of the materials of the Japanese avant-garde theater in the 1960s and the construction for a research base (the Kara Juro Archive) will greatly contribute to theater studies. In the process of the investigation, we could discover new materials and published them in general magazines such as "the Bungei", and also planned and supervised "the Experimental Theater and Kara Juro" exhibition and published a booklet. The material confirms that the Japanese avant-garde theater of the 1960s has a context linked to earlier realism theater and "experiments" of contemporary arts. We also investigated overseas performances and reconsidered them as a part of the global avant-garde art movement. The fact that these results were published as a thesis and made publicly on symposiums, etc., would be of great significance for the development of contemporary theater studies in the future.

研究分野：現代表現論

キーワード：現代演劇 身体 前衛芸術 アーカイヴ 1960年代 唐十郎 寺山修司 土方巽

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 1960年代の前衛的な舞台芸術は、その代表的な表現者である土方巽、寺山修司、唐十郎らの挑発的な活動にもより、ともすれば「アングラ」と蔑称され、少数の例外を除き演劇研究の対象にならず、同時代の内外の美術、ダンス、文学の動向と連関して論じられる事も少なかった。論じられても、既成の演劇に対抗した反新劇運動として演劇界内部でとらえられてきた。

大きな影響を社会・文化に与えたにも関わらず、20世紀の文化史、日本の戦後文化との文脈も読解されないまま資料が散逸し、研究や文化の継承に支障をきたしていた。これらの前衛演劇は世界史的な文脈からもとらえるべきで、20世紀初頭の政治的前衛、芸術的前衛との世界的連関など、海外での受容を解明する必要があった。

(2) 時間の経過とともに関係者は高齢化し、資料も散逸する恐れがあり、基礎的な研究基盤を作ることが必要だった。そのため、国やジャンルの領域をこえた資料の収集、そのアーカイブ化の方法論の探求、分析手法の開発などが急務となっていた。研究代表者(樋口良澄)は、60年代の前衛的な舞台芸術を、世界的な前衛演劇運動の文脈からとらえ直し、研究基盤の構築を試みた。

2. 研究の目的

本研究は、日本の1960年代前衛演劇運動が、どのように身体表象をとらえ、独自の演劇空間の開発により演劇表現を行なったかを、新たな資料をふまえ、同時代の舞踏、美術、文学などとの連関の中で解明するものである。60年代前衛演劇運動は、それまで中心だった西欧由来の新劇や伝統演劇に対抗し、独自の日本発の表現を展開した。それらは、演劇を越えた影響を現在まで与え続け、世界的にも注目されている。即興や直感、関係性や出来事性を重視する独自の方法は、これまでの演劇研究の文脈からは収まりにくかったが、本研究は、土方、寺山、唐という連関の中で確立された新しい資料や証言をもとに基礎的な研究基盤を作り、総合化・理論化することをめざすものである。

3. 研究の方法

本研究は、1960年代の前衛演劇を土方巽、寺山修司、唐十郎を中心に分析し、反近代、反演劇を主張しながらどのように独自の演劇表現を形成したかを解明するものである。研究方法は、次の3つに大別できる。

(1) 寺山修司は寺山修司記念館、土方巽は慶應義塾大学アート・センターと協力し、資料ネットワークの構築を進める。唐十郎は、未発表資料を含めた演劇資料や証言をデータ化、創作過程を解明する。

(2) 彼らの表現活動を言語、身体、空間、メディアの視点から他ジャンルも含めた領域横断的に分析する。その成果を、公開シンポジウムなどで討議を行ない、領域を超えた視点からとらえる。

(3) 上記をふまえ、論文や資料集、アーカイブを作成し、現代演劇の研究基盤を構築する。

4. 研究成果

(1) 主な研究成果は次の1～3である。

明治大学唐十郎アーカイブに所蔵されている60年代前衛演劇の資料をデジタル化し、一般に利用できる体勢を整えられたことは、「研究基盤の構築」という本研究の目的に即した大きな成果である。アーカイブは、大学の認証を経て間も無く公開される。土方巽、寺山修司、唐十郎の表現は、単に演劇というにとどまらない、出来事性、過程性の性格を持つ。そうした不定形の資料をどのように記録、集成するかは課題だったが、アーカイブ化の方法論を慶應大学アート・センターと共同で研究し、その成果をシンポジウムや雑誌で発表できたことは、今後の研究活動に寄与するだろう。

調査の過程で貴重な資料、証言を得ることができた。新発見の資料＝唐十郎の最初の戯曲と小説「文藝」など一般誌に発表したほか、「実験劇場と唐十郎」という小冊子を作成し、1960年代前衛演劇が、それ以前のリアリズムおよび「実験」と呼ばれた芸術他ジャンルを試みと連続した活動だったことを明らかにすることができた。研究成果は上記印刷物の他、シンポジウムを開催し一般に公開した。

日本の1960年代前衛演劇が他国からどう捉えられていたか、韓国、アメリカ、フランス、レバノンに彼らが海外公演を行った軌跡を追跡し、その評価を調査した。特に韓国、レバノンでは、海外公演の嚆矢とも言える状況劇場公演を調査し、彼らが政治的に過酷な状況の中、地元の演劇関係者や観客と一緒に舞台を作っていた事実を跡付けることができた。またポンピドー・センター、ニューヨーク近代美術館で過去の前衛演劇の展示を調査し、世界的な前衛芸術運動の文脈の中で捉えられていることを確認した。アメリカ、ヨーロッパ、アジアの多様性の中で前衛演劇運動を再考察できたのは、本研究の大きな成果である。

(2) 以下、年代順に記す。

2017年度は、西ミシガン大学での講演、またオベリン大学で行なわれたAIJSのViolence, Justice and Honor in Japan's Literary Cultures のテーマによる研究学会での発表、そしてその参加者と議論できたことは、本研究を海外で問うための大きな成果となった。

また、アメリカと韓国で状況劇場、および天井桟敷の海外公演の調査を行い、日本の60年代前衛演劇の身体表象が、当時の反近代の世界史的コンテクストの中で受容されたことを確認できたのも大きな成果であった。演劇資料調査のみならず、関係者に聞き取りを行うことができ、貴重な証言を得ることができた。

60年代前衛芸術運動の担い手である寺山修司について、青森時代、早稲田時代の最初期の関係者に聞き取りを行なった。この調査を背景に、劇言語と劇空間の生成を論文としてまとめ「現代詩手帖」12月号に発表した。

唐十郎の明治大学時代や状況劇場結成以前の関係者に聞き取り調査を行った。この成果は2018年に「実験劇場と唐十郎 1958-1962」展として展示した。

2018年度は、1960年代に唐十郎が所属した明治大学実験劇場の団員を東京、大阪、長野、青森など、全国に尋ね、聞き取り調査をした。その結果、リアリズム演劇から実験演劇が生成したプロセスを明らかにすることができた。唐と、鈴木忠志、別役実、寺山修司らの初期を比較し、前衛演劇と当時全盛だったリアリズム演劇の関係を演劇史の中で検証した。その成果を明治大学図書館ギャラリーで「実験劇場と唐十郎 1958-1962」展として監修・展示し、資料集を作成した。オリジナル作品の台本、演出記録など貴重な資料を発掘することができた。

その過程でこれまで未知だった唐十郎が1961年に書いた初シナリオ「幽閉者は口開けたまま沈んでいる」、初小説「懶惰の灯籠」を発見し、「文藝」2018年冬号に掲載し、解説を書いた。これまで不明だった唐十郎の出発を解明できたことは決定的な成果と言って良いだろう。唐十

郎アーカイブで、シンポジウム「実験劇場と唐十郎」(10月13日)を企画し、その研究成果を発表した。

土方巽調査では、青森の融美術館、土方巽アーカイブ(慶應大学)で調査、関係者の聞き取りを行った。寺山の調査も青森で現地調査を行った。これらの研究を、慶應大学アート・センターのシンポジウム「ジェネティック・エンジン」(11月17日)で、土方、唐、寺山の3者関係や、アーカイブ化の方法論として発表できたのは大きな成果だった。

2019年度は、2018年に展示資料集として監修・作成した「実験劇場と唐十郎」を増補し、冊子として明治大学唐十郎アーカイブから刊行した。1950年代末から60年代にかけて、リアリズム演劇と大学演劇がどのように前衛演劇運動に関していったかを、新発見した資料を通じて論じた。資料リストも掲載し、60年代前衛演劇前史の資料集が刊行できたことは大きな成果である。資料からは演劇にとどまらない、芸術における「実験」の世界的な文脈を読み取った。

現代演劇の演劇資料をアーカイブ化し、今後広く研究の基盤となる「明治大学唐十郎アーカイブ」のデジタル・アーカイブ構築を担当、資料のデジタル化、デジタル・アーカイブの設計において、実践的な研究活動を行ない、公開に向けての作業を終えられたのは本研究の大きな成果だった。その研究過程を「唐十郎の演劇世界とアーカイブ」(「Booklet」27号「芸術とアーカイブ」、慶應義塾大学アート・センター刊)として執筆し、一般に公開した。

ポンピドー・センター(パリ)で1986年に開催された「日本の前衛展」の関連資料を現地調査した。寺山修司、佐藤信らの日本の60年代前衛演劇や土方巽の舞踏がどのように海外で「発見」され、国際的文脈を獲得したかを追跡した。2018年のニューヨーク調査と合わせ、60年代の日本の身体芸術が持つグローバルな文脈を確認できたことは大きな成果だった。

日本の60年代前衛演劇が同時代において国際的に展開した過程を研究する一環として、これまで調査されたことのなかった状況劇場のシリア/レバノン・パレスチナ難民キャンプ公演を現地調査。バイルート・アメリカン大学で開かれていた足立正生展(足立は状況劇場公演に関わった)の展示や反響の調査も行い、アラブ世界と日本の芸術活動との当時の交流を確認できたことは大きな成果だった。

2020年度は、引き続き演劇アーカイブの研究を続け、慶應義塾大学アート・センター、早稲田大学演劇博物館など関係諸機関をリサーチした。この研究成果を検証するため、2021年3月12日に唐十郎アーカイブと慶應義塾大学アート・センターの共催で公開シンポジウム「映像と演劇アーカイブ 記録は現場に拮抗するか」を企画・実施した。新型コロナ・ウイルス蔓延状況のため、やむなくリモートでの開催となったが、記録は配信予定である。映像記録とデジタル・アーカイブの有効性とその限界、研究への展開について総合的に議論できたことは本研究にとり大きな成果だった。

唐十郎アーカイブのデータ・ベースは、1960年代から現在に至る現代演劇研究の基礎的な拠点となるものであり、デジタル・メディアの特性を生かした、演劇の歴史と創造に関わる活用が可能である。大学の認証を経て研究者、一般に向けて公開するが、このような研究拠点を整備できたことは、本研究の大きな成果である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 樋口良澄	4. 巻 27
2. 論文標題 唐十郎の演劇世界とアーカイヴ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Booklet	6. 最初と最後の頁 48-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口良澄	4. 巻 1
2. 論文標題 実験劇場と唐十郎1958-1962	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実験劇場と唐十郎 1958-1962	6. 最初と最後の頁 15-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口良澄	4. 巻 57巻
2. 論文標題 唐十郎 へ、初源への遊行	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文藝	6. 最初と最後の頁 317,322
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口良澄	4. 巻 1巻
2. 論文標題 「実験劇場と唐十郎 1958-62」ガイド	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 実験劇場と唐十郎 1958-62	6. 最初と最後の頁 2,7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口良澄	4. 巻 3275
2. 論文標題 オレ という他者の物語	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 週刊読書人	6. 最初と最後の頁 5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口良澄	4. 巻 60巻
2. 論文標題 詩像 ・ 市街劇 ・ 市街詩	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 現代詩手帖	6. 最初と最後の頁 145 150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 樋口良澄
2. 発表標題 身体と戦争
3. 学会等名 THE ASSOCIATION FOR JAPANESE LITERARY STUDIES (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 樋口良澄
2. 発表標題 The body and war
3. 学会等名 Association for Japanese Literary Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 樋口良澄
2. 発表標題 Representations of the body in 1960s Japan
3. 学会等名 ウエストミシガン大学（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 木村郎子、アンヌ・バヤール=坂井、 樋口良澄他16名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 総521ページのうち134-150ページ
3. 書名 世界文学としての 震災後文学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

企画監修したシンポジウム 「実験劇場と唐十郎 アングラの前に「実験」があった」2018年10月13日 明治大学唐十郎アーカイヴ 「映像と演劇アーカイヴ 記録は現場に拮抗するか」2021年3月12日 明治大学唐十郎アーカイヴ・慶應義塾大学アート・センター（共催）

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------